

ほぼ全面左官仕上げの内装で、左官の可能性と快適なオフィス環境を追求

株式会社フロアエージェント・新社屋

「200年」持続を目指した新社屋

工場で完成させた製品とは違った、どこか素朴で、穏やかな表情を見せる左官仕上げ。そうした特性を存分に生かそうと、内装をほぼ全面左官仕上げとした特徴的なオフィスが、昨年11月、東京・足立区に誕生した。

このオフィスは、床コンクリート工事、左官工事を手掛ける、㈱フロアエージェント(又吉雄二社長)の新社屋。RC造3階建て、外装はコンクリート素地仕上げにフッ素のクリアコーティングを施したもの。このコンクリートには、施主であるフロアエージェントの深いこだわりがあって、建物を「200年」持続させるべく、鉄筋量、かぶり厚、打設方法などあらゆる工夫を凝らして耐久性を高めている。もちろんこれは、建物長寿命化による環境負荷の低減を目指したものだが、そこにはコンクリートを扱う企業としての矜持も感じられる。

棚の扉やデスク天板も左官仕上げ

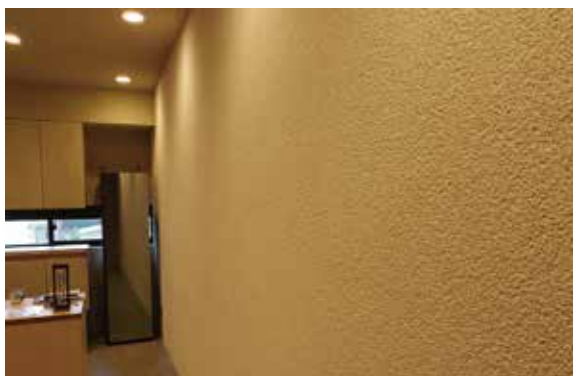
そのような、チャレンジングとも言える施主の姿勢が見える新社屋だが、内装はさらに凝っている。

内装の最大の特徴は、壁、床、天井と、ほぼすべての部位が左官による仕上げとなっている点だ。一部の梁など、コンクリート素地が表れている部分は外装と同じくクリア塗装がなされているが、他の部分は、棚の扉やデスクの天板に至るまで、同社の左官の技術を駆使して仕上げられている。クロスはまったく使われていない。

これほどまでに内装に左官仕上げを採り入れた点について又吉社長は、「まず、左官工事を行う会社として、左官の可能性を広げたいというのがありました。そのスペースに適した色使いや、快適さを向上させるような仕上げを工夫しながら施して、効果を体感できるようにする。つまり、自分たちがユーザーになってみて、その良さを実感し、また改善できる点が見つかれば対策を考えて、提案の幅を広げるということです。その上で、本来



応接室。壁、床はもちろん、天井、扉やテーブルの天板まですべて左官。テーブル天板は「エクストン」の研ぎ仕上げ。「アンティーク・モルタル」による、ブリーツ状のデザイン壁が印象的。



応接室の壁のうち、1面を掻き落とし仕上げにして音の反響を抑える工夫も。



棚の木製扉も1mm厚程度の左官仕上げに。



植栽を通り抜けた柔らかな光の入るオフィスルーム。床は「エクストン」の研ぎ仕上げ。デスクも、木の天板に左官仕上げ。



コミュニケーションを円滑にするという黄色で壁が仕上げられた打ち合わせルーム。



こちらの打ち合わせルームは落ち着いたバーガンディーの磨きで。

のユーザーの方々に、実際のオフィスに施工された左官仕上げを、時間の経過や、使用していくことによる変化までを含めて見ていただきたい。すなわち、ショールームを兼ねたオフィスにしたいという思いもありました」と、意図を説明した。

色使いや仕上げの工夫としては、打ち合わせルームの壁に、コミュニケーションを円滑にすると言われる黄色や、落ち着きあるバーガンディーを用いるなどして、部屋ごとに特徴を持たせている。また、応接室の壁のうち1面を掻き落としにして粗面とし、音の反響を抑える試み



どこか温かみを感じさせる研出しの床。



コンクリートと左官仕上げ。ツートンカラーの階段室。